

事例研究

日本統治下台湾の沖縄出身者がみた“新高港”の夢 —宮崎禎治オーラルヒストリー—

菅野 敦志*

要旨

本インタビュー記録は、宮崎禎治氏のオーラルヒストリーである。本資料は、沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験について、日本統治時代の台湾で実際にどのような生活を各個人が経験されてきたのか、そうした実際の生活体験の聞き取りを記録化し、研究の一助とすることを目的とする。宮崎氏は石垣生まれではあるものの、進学のために渡台された後に台湾総督府での勤務を経験されるなど、台湾で都市計画に従事された氏の経験は貴重である。本資料の目的は、個人の経済的・政治的成功の軌跡を跡付けるためのオーラルヒストリーではなく、日本統治時代の台湾で人々がどのように生活されてきたのかを記録化することに主眼を置くものである。

キーワード

オーラルヒストリー、人の移動、台湾、沖縄、日本統治時代、新高港都市建設

I. はじめに —調査目的と概要—

本資料は沖縄在住で台湾での生活経験を有する人物へのインタビューを基にしたオーラルヒストリー集の一部である。

独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (A) (海外学術調査)「日本敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変容の口述歴史に基づく研究」(課題番号:25257009)では、研究代表者の栗原純および研究分担者の所澤潤を中心とするオーラルヒストリーの採集・記録の蓄積が精力的に進められてきた(一連の成果は、『台湾口述歴史研究』シリーズとして、2016年3月に第19集まで出された。編集:台湾オーラルヒストリー研究会、発行者:東京女子大学 栗原研究室)。

オーラルヒストリーは、語り手にとっての個別の史実をどのように一般化できるかという課題について、証言をいかに記録化すると同時に、証言の批判的な読みが必要となってくる点

* 執筆 者: 菅野敦志

所属/職位: 公立大学法人名城大学国際学群/上級准教授

機関住所: 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1

E-mail: sugano@meio-u.ac.jp

がしばしば指摘される。しかし、現在においても、日本の植民地であった台湾で実際に人々がどのような環境の中で日常生活を営んでいたのか、「内地人・沖縄人・本島(台湾)人」の関係性や相互の感情にはどのようなものがあったのか、彼らが戦後お互いにどのようなつながりを有していたのか等、当時(あるいはその後)の状況が十分明らかにされ尽くしたとは言い難い状況にある。

そのようななか、戦後70年が経過し、かつて日本が有していた植民地での生活経験者の聞き取りにはもはや時間的余裕が残されていない。そのため、1人でも多くの日本統治経験者の聞き取り蓄積を残し、公の記録ではあまり見受けられない、こうした一次史料の一刻も早い記録化と蓄積作業の進展が急がれている。このような問題意識の下、これまでの研究グループによるオーラルヒストリーの成果を基に、筆者は研究分担者の1人として、沖縄出身/在住者で台湾での居住・生活経験を有される方々へのインタビューを実施してきた。本資料はその成果の一部として位置づけられるものである。

本インタビュー記録は、宮崎禎治氏のオーラルヒストリーである。宮崎氏は、沖縄出身の母親を持ち(鹿児島出身の父親は生後間もなく他界)、1920年(大正10年)に沖縄の八重山群島・石垣島に生まれ、進学のため台湾に移った。台北で末広高等小学校、台北工業学校で学んだ後で台湾総督府に就職し、戦争ではフィリピンへの派兵を経験した。敗戦後は1946年に宮古島に引き揚げたが、1950年に沖縄本島に移り大工業を経て、測量会社を立ち上げ、現在は協立測量社会長を務める。

宮崎氏は石垣生まれではあるが、台湾での学業および台湾総督府での勤務経験は歴史史料として極めて貴重である。本資料は、個人の経済的・政治的成功の軌跡を跡付けるためのオーラルヒストリーではなく、沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験について、日本統治時代の台湾で実際にどのような生活を各個人が経験されてきたのか、そうした実際の生活体験の聞き取りを記録化し、研究の一助とすることを目的とするものである。

インタビューは2015年11月3日、場所は宮崎氏が経営される協立測量社事務所にて実施した。なお、文中で括弧書きがある部分は筆者による補足説明である。

II. 幼少期の環境と家族構成

菅野 お生まれになって、小さい頃からのお話を順番にお聞かせ願えればと思います。まずはお生まれになった場所についてお聞かせください。

宮崎 石垣島の字石垣21番地の1で生まれまして。小学校は、石垣尋常小学校、高等小学校ですが、そこの尋常科、小学校の6年まで終えて、で、入学試験があったわけです。当時、石垣島には中学校がないんです。今の中学校ですが、それで、どこへ行くかといえば、沖縄本島。しかし、受験は石垣島で受験して、パスすれば本島へ来る。結局、沖縄本島に来れば、

学寮に入るか、寄宿舎に厄介になるとか、そういう生活です。二重所帯になるわけですね。私はたまたま昭和8年に受験したんですが生憎不合格で。そうすると石垣島で次の学校は、農林学校はあったようですが、八重山農林ってところですが、私は農林は希望していなかったの、結局どうするか、島で高等科に入るか、出ていくかで。そしたらお袋がたまたま台湾に行くということを提唱したもんだから、家族はその時、お袋と姉と3名ですから、すぐさま台湾行きを希望しまして、昭和8年の3月1日に台湾に行ったわけです。

その時分は沖縄県立第二中学校、今の那覇高校なんです。首里が一中。受験して滑ったもんですから、お袋が「台湾に行く」と言って飛び出した。向こうに、台北に料亭時代の酌婦みたいな方があって、その方の住所を知っていたんですね。そこで台北にすぐ文通して、「台湾に行って受験させたいから」と言って、そこで御厄介になって。

菅野 台湾に行かれる前、石垣での生活や環境はどのようなものでしたでしょうか。

宮崎 石垣はゆったりした島で。私に言わすと、老人の島です。石垣でね、何になろうとか、大きな規模は全然。企業がないですから。早稲田の総長の信泉（＝大濱信泉）さん辺りも、石垣で生活したらあんな大物にはなりませんよ。

菅野 家族構成について教えてくださいませんか。

宮崎 家族はですね、お袋と姉と私3名が、生まれてからずっと3名で生活していた。そして、ちょうどお袋が昔料亭をやっていたらしいんですよ。大正屋っていう料亭を。それは私全然記憶にありません。生まれた時は料亭はやってません。それでお袋は琴を教えたり、そういうことで、一家の収入をやっていたようです。それであんまり贅沢にはしていませんが、食べるには不自由しない生活でした。

親父との関係がですね、私が生まれた翌年、大正10年の6月に死んでるんですよ。だから親父の顔全く知らない。病気で、台北で死んでる。結核で。台北病院で死んでる。死んだ写真だけあるんですよ。だから親父の顔ははっきりわからない。石垣にね、最初浜崎商店っていう、今はないんですが、そこに住み込みで生活して。そこで徴兵検査までやって。徴兵検査終わってからは今度は一本立ちして自分で小さな店をやって。最後亡くなる頃は鰹漁業やってるんですよ。それが当たりましてね、漁船7艘位持っていた話があります。

Ⅲ. 石垣から台湾へ

菅野 では、台湾に行かれるまでについてお聞かせいただけますでしょうか。

宮崎 当時昭和8年3月1日、数え13歳で。

菅野 台湾には船で行かれたと思うんですが、どのような船だったのでしょうか。

宮崎 3,000トン級。沖縄の船は湖南・湖北丸っていったね、その時分もう決まってるんですよ。基隆に着いたら大きな船が泊まると。富士丸なんか7,000、9,000トンで基隆の港に大

きくいるが、湖南・湖北丸どこの片隅にずーっと遠くの方において、「どこに行く船があの船か」、「沖繩行きだよ、あれは」、って言って。(笑い)

石垣島には船は寄港しませんから。降ろすとすぐ出てくでしょ。石垣島ではそういう(大きな)船を毎日は見えていないんです。棧橋に船がつかない。石垣島と竹富島の間に船が泊まって。台風とかあったら逃げにゃいかんから。石垣島にはその船の駐留箇所はないんです。その時分台湾で泊めていたのかはわからない。

菅野 石垣から船を乗られる時は。

宮崎 ポンポン船。(笑い) 竹富島との間に泊まってるから、そこに繋ぎをするんです。今みたいに棧橋で横づけはしてないんです。棧橋出すには出したけど全然。船と繋がる所までは来てない。ポンポン船乗って本船まで行って、乗ってそして台湾へ行く。

菅野 船に乗る時はどうやって乗られたんでしょうか。

宮崎 梯子で。

菅野 基隆まではどれ位かかりましたでしょうか。

宮崎 基隆にはね、1泊か2泊位…長くはないですよ。石垣島を出てね、確か西表の付近でね、石炭を積んだ。夜中石炭積んで、すぐまた出航して基隆に入ってる。そんなに長い期間はかかってないです。基隆着いたら台北への列車が出ますから、夜ではなく朝だったと。

その時はまだ小学校の6年で、どこの港で、どこに泊まって、どんなにして列車乗ったか。列車初めて見ますからね。(笑い) 石垣島には列車はないでしょ。(台湾へ行く) その前には内地にも行ってないし。基隆はね、義重町ってのが一番の繁華の場所。基隆は非常に雨の多い所で。

菅野 台湾に到着された時の印象は何かありますか。

宮崎 全くないな。着いたのは基隆港でしょうが、それから列車乗って、そして台北行って、ようやくお迎えの方に連れられて。台湾は初めてですから、何も印象に残らんですよ。行った時は、落ち着いて学校にでも入るようになってから初めてあっちこっち眺めたんで。その前はもう台湾は全然わかりません。その代わり、台湾総督府に入ってから全島回ってますからね。澎湖島も行った。兵隊で。台湾は大概歩いています。

小学校のイメージではね、「広いなあ」っていうだけ。石垣島で見えるものは範囲が狭い。もうしかし、台北って所は昭和19年で40万位の人口いってますからね。

菅野 台北は「大都会」という感じはありましたか。

宮崎 いや、そんなにまでは知らないですね。行った所が建成町(現在の台北市大同区)ってところで、台北市の場末か真ん中か、その辺までもわからなかった。役所に就いてからは、台湾総督府まで毎日歩いていますから。本町とか京町とか栄町とかって通りを通ったんだよ。それからちゃんと覚えて。どこに何があるってのは全部わかって。台湾に渡った時分は何もわからなかった。

菅野 台湾に着かれて、台湾の食べ物で沖縄に似ているとかは感じたりしましたか。

宮崎 食べ物は要するに、台湾は贅沢だなあと。果物はね、パパイヤでもバナナでも、沖縄のバナナなんてちっこい島バナナ。ちっこいでしょ。あっちは大きい。パパイヤでも、青いけど実際は熟してる。それ知らずに、中学校時代、工業に入った時には、台湾の南部の方に行って、台南辺りでパパイヤ買って自分の台北（の家）に送ったら、送る時は青い。着いてみたらグジャグジャになって。（笑い）「なんだこれは！」って。「初めからグジャグジャを送ったのか」ってお袋に言われた位。（笑い）

菅野 そうして石垣から台湾に行かれて、到着された後の生活は。

宮崎 台北では知り合いを訪ねていきまして、台北市建成町2丁目11番地に、日本人の住宅がありまして、その2階の木造を借り受けましてね。そこで生活したわけですよ。ちょうど高等科、初年次も向こうの学校希望したんですがパスしないで。結局2カ年間は高等科に行きまして。

IV. 末広高等小学校

菅野 台湾には受験で行かれたわけですね。

宮崎 はい。学校の受験で。尋常科じゃなくて高等科に。尋常科は6年、高等科は2年。末広高等小学校ってのは高等科だけ。末広高等小学校は受験を目的とした学校で。それでも結構、1クラス60名位で、1年生だけでも3クラスありましたからね。そうすると2年で倍の6クラス。1クラス60名ですから1,000名位いるわけですよ。ほとんど受験を対象にしているもんですから、高等科を出て就職される方もいたでしょうけど、われわれの頭には入学試験しかないもんですから。

菅野 末広高等小学校で思い出に残っていることはありますか。

宮崎 卒業証書とかありますよ。お見せしましょうか。（写真、学生名簿、成績表、卒業証書、辞令等の資料を事務所の奥から持ってくる）

宮崎（資料をめくりながら）末広は受験だからね。これ卒業証書。（通信簿を指差して）これ昔の通信簿です。成績は良かったようです。成績優秀をもらってる。（笑い）

菅野 末広高等小学校は、日本人…。

宮崎 日本人と台湾人一緒。この中（写真）に台湾人いますよ。

菅野 クラスの割合としては。

宮崎 ほとんど日本人が多い。これ（写真）見ると台湾人は少ないですね。台湾人の学生は10名もいないなあ。そんなに記憶にない。台湾人は公学校ってのがありましたからね。公学校にしかほとんど行ってない。公学校ちゅうのと小学校は別個にされていましたからね。

菅野 ちょっと見せていただいていいですか。（名簿を見る）これはここまでが第18学級ですか。

宮崎 そうです。

菅野 何人でしたかね。

宮崎 65名。そのなかでの成績が12。成績ですよ、これ。1年の時、65名のうちの12番でした。この時分大したことないけど。(笑い)

菅野 ちょっと(名簿を)見せていただいてもよろしいですか。

宮崎 はい、いいですよ。

菅野 これは上と下、ここまでが第18学級でしょうか。

宮崎 そうです。ここまでが。この(氏名の)上にね、建成とか北斗って書いてるのが小学校です。小学校ってよりは、台湾人の公学校…。いや、これはしかし建成小学校だな。建成は小学校です。こっちの北斗はちょっと学校がわからん。出身校ですよ。

私はこの時は沖縄と書いてないかな…。私の名前がこの辺に…あ、内地と書いてある。石垣ですから内地にしてあるんだ。建成町2丁目11番。

菅野 第18学級は66人いますね。

宮崎 (名簿を指差して)この辺から台湾人でしょ。これ見ると、台湾人は…(名簿の名前を数えながら)1, 2, 3, 4, 5, 6。66名中1割か。66名中1割は台湾人が入ってるね。

菅野 名簿を見ると、66人中6名が台湾人ですね。なるほど。出身校が、南門が2人、建成が2人、淡水が1人、北斗が1人…。

宮崎 南門ってのは南門小学校ですよ。台湾人の学校ではない。

菅野 沖縄出身の学生は…。

宮崎 沖縄出身はそんなに多くない。入仲本ってものいるでしょ。

菅野 沖縄は…(名簿を見ながら)宮崎さんと、入仲本くんですね。

宮崎 そうですね、沖縄は2人じゃないかな。2人だね。ほとんど本土ですよ。入仲本どこにいったかな…あ、こっちにいる。これ(入仲本くん)は確か、竹富か与那国ですよ。これ(名簿を指差して)沖縄2人じゃないかな。他には…新垣、大田…ちょっとクラスが違うからわからん。

16, 18…。17が女子だはずですよ。16, 18, 20ですよ。

(名簿をめくりながら)あら、西森先生だ。これは2年の時だな。私のクラスの武田先生は2年です。

菅野 武田先生はどういう先生でしたか。

宮崎 ああ、おっとり型。もうのん気な先生です。(笑い)

菅野 出身はどちらでしたか。

宮崎 それはここに書いてありますよ。出身。武田先生は…。

菅野 あ、こっちです。武田源太郎。愛媛ですね。

宮崎 武田源太郎。ああ、愛媛。もうあっちこっち、流れ者ばかり。(笑い)長崎、熊本、山梨、

京都…。正田、ああこの人厳しかったな。女の先生、小池、阿部、武田、西、中田…。高1の時の先生は厳しかった。西江っていったかな。

（写真を指差しながら）これが武田ですよ。そんな時の生徒がこれ。おっとり型の先生です。

1年の先生はね…これだ。西澤光雄。この先生はね、厳しい先生で、竹刀持って、入学の時にすぐ試験勉強させる。問題出して、全員に。そして、クラスを分けるんです。成績で、これは甲の組、これは乙の組、これは丙の組、と分けて。そして、次2回目の試験で、甲は何点以上、乙は何点以上と決めてるもんですから、甲の者がさぼって怠けて、私のお尻をすぐやられる。（笑い）

菅野 竹刀で。

宮崎 いや、木刀でね、木刀ですぐ殴るんです。いやーこの先生は怖かった。ま、しかしこの先生のおかげで勉強はしたんですよ。優しい先生だったら少し、高等科からなまくらになってるからね、なめてかかるから。（笑い）まあやっぱり、受験する連中は一生懸命ではあるけど。

しかし皆が皆受験生とは限ってないんですよ。なかには受験しないでいったのもいるし、もうその後どうなったかわからん。受験して一緒に同じ学校に入った連中は知ってるけど。

菅野 この末広で2年間受験勉強されて。

宮崎 ええ、末広は受験校でしたから。

菅野 先輩とかクラスメイトとか、どういった所に進学されていましたか？

宮崎 そうですね、工業も多かったしね、そして、台北の一中行く連中はね、家庭が裕福ですよ。一中はね、一中はそこでは止まらん。要するに普通の中学ですから、それからまた高等学校、大学と希望があるわけですから。もうそういう連中は家庭も裕福でしょう。お父さんなんかは官公署の官吏ですよ。もう落ち着いた方。そういう方は工業関係は少ないね。僕らはもう実務畑に走らされてるから。家庭が違う。

菅野 じゃあ工業とか商業とか…。

菅野 商業もいるんですよ。いるんだが、商業があんまり行ってない…わからんな。工業、商業、農林校は全然わからん。

菅野 それでは皆が目指したのは…。

宮崎 そうですね、中学ですよ。普通の中学にね。

菅野 では（宮崎さんも）末広の2年間で進路を決められて。

宮崎 そうです。その間に私の進路が決まって、5カ年間、台北工業の土木で勉強して、で、卒業と同時にもう今度はすぐ兵隊が待ってます。余裕がないんですよ。年齢が年齢で、満20歳で徴兵検査ですからね。

（写真を指差して）これ、小さい時の写真、これ小学校の5年位、石垣島で。これがうちのお袋です。

菅野 きれいな方ですね。

宮崎 私です、これ。私の時代は洋服はないですよ。石垣島では、全部着物ですよ。台湾に行って靴を買ったんです。(笑い)皆裸足で学校には通った。野蛮人だった。(笑い)

台湾ではズックを履いて、「これが靴だ」とわかったんだ。台湾人しかこのズックを履いてなかった。日本人は革靴ですよ。

菅野 ズックというのは…。

宮崎 今の(写真の)これ。運動靴ですよ、ズックは、台湾人が履くのはズック。で、日本人はほとんど革の靴。瘦せても枯れても。

菅野 そうした違いはどうして…。

宮崎 そりゃ革とズックとは(違いが)すぐわかるさ。履いたら全然違う。ズックは柔らかいでしょ、運動靴だから。革靴は硬いよ、革の靴だから。

私は向こうで台湾に行って初めて靴履いたんだから。それまでは(石垣島の)小学校は裸足で学校に通った。しかし、末広に入ってから気が付いたのは、私はお袋が買ってくれたのが台湾人のズックなんですよ。ところが、日本人は小学校から皆、革の靴。革靴っていっても、高級な革の靴ではないんですよ。学生の革靴ですから。

菅野 ズックの方が歩きやすそうですが…。

宮崎 歩きやすい。そりゃ歩きやすいですよ。だけど値打ちが落ちる。(笑い)革靴が値段が違う。(笑い)

これは兵隊行く時の写真。昭和19年。

菅野 りりしいですね。ハンサムで。

宮崎 こっちがお袋、こっちが姉。

菅野 これ(資料)すごいですね。引き揚げられる時に全部持って。

宮崎 ええ、持ってきました。お袋がね、私が兵隊に行ってる時に全部とっておいてくれて。

V. 台北工業学校

菅野 末広の後は台北工業学校に入学されたとのことですが。

宮崎 そこで、台北工業学校土木科に、これ5カ年制の学校で、そこに入りまして。本来は、目的は私は医学を希望していたんですけどね、ところが医学となると経費が相当かかりますし、お袋の経済、生活では卒業するまでできないものですから、急遽切り替えて、実業学校に、工業学校に行ったわけです。

菅野 工業の道に進まれたんですね。

宮崎 石垣島辺りはもう工業もない。農林校は昭和8年に石垣島にもあるそうです。私は全然眼中になかったから。工業でも、沖縄の工業は今でも3カ年制でしょ。僕らみたいな所は

5カ年制ですからね。学歴が違うんですよ。甲種と乙種の差があるんです。だから、沖縄工業は土木がないんです。戦前は、建築、それと漆工、それと…機械も聞かないね。

うちの学校は5つ科があって、キ、機械科ですね。ド、土木ですね。キ、ド、オ、応用科学。キ、ド、オ、デン、電気ですね。建築。その他に採鉱冶金科、鉱山関係の科が私ら3年の時に一つできたんです。だから6科です。で、40名の採用ですから、私らが入った時は採鉱冶金できないから、5科で40名ですから200名。これが1年生。5カ年制ですから1,000名はおるんですよ。

結局相当厳しくいってますから、落第したり。今言ったように40名採用された。しかし、卒業した時は37名です。37名は全部名前もわかるんですよ。皆死んで、今は7名位しか残ってない。兵隊行ったのもいるし、病気で死んだのもいるし。

うちの工業でもね、クラスの10番以内は全部台湾です。切れるんですよ。頭が。漢文も連中お得意だから。英語も漢文の形態で走ってる。ダメなのは国語だけ。英語、数学、そういうのは全部台湾の方が上です。ですから、工業では日本人が40名土木に入学して、卒業したのが37名。その内7名が台湾人です。その7名は皆10番以内にいます。皆台湾人は成績いいですよ。日本人の方がどんけつ、危ない。(笑い)

菅野 台湾の学生さんから見ると、自分たちは勉強で上昇しなきゃいけない。と。

宮崎 そうですね、そういう感じですね。それで日本人教育が、また、日本の中等学校に入る連中は、公学校出身でも、普段家庭も日本教育という重点主義にもっていつてるから、もう台湾語はほとんど使わんです。日本語ばかりしてますから。

菅野 国語家庭ですね。

宮崎 そうです。なかには日本人名に改名してる輩もいます。改姓名なんかあるからね。台湾人が、私らが台湾にいる間に大分改姓名してる連中がいた。うちの建築におった、東京の例の、東京タワーの設計やった、郭茂林っていう。2年前かな、亡くなったの(2012年没)。これはうちと同級生です。しかし、郭茂林は名前変えてないな。なかにはもう日本名に改名して、戦争負けてからまた元に戻した連中もいる、という状態です。

菅野 クラスの中の沖縄出身のお友達とかは。

宮崎 (名簿を指差して) 金城と米倉っているんですよ。これ(米倉は)石垣の人間です。沖縄は土木の中で3名です。私を含めて。

菅野 37名中の3名ですね。(名簿を指して) すごいですね、きちんと整理されて。

宮崎 今でも50音順にすぐ並べられますから。(笑い) 5年間一緒なのに。覚えるよ。(笑い)

もう少ない。ほとんどのこの3名でも、学校までは一緒だが、卒業したら別です。金城くんなんかは戦後はね、熊本に勤めて。沖縄にいないんです。米倉は石垣にいましたが、あれも私が沖縄に来てから死んだんだね。

菅野 この方は何と読みますか？

宮崎 みはらづめ(三原詰). これは学校卒業してすぐ死にました. 病気で死んだ. これは兵隊行っていない.

菅野 昭和15年同期生, ですね.

宮崎 昭和10年に入学して5年間一緒の付き合いですから, もう顔もどんな顔って全部覚えていますよ.

菅野 それでは土木科にいらした時の思い出にはどのようなものがありましたか?

宮崎 内地旅行. 台湾から旅行して, 日光まで行きましたから, 修学旅行で. その時分からちょっと戦争のあれが出てきたんですよ.

菅野 それは何年頃でしたか.

宮崎 昭和14年. ガソリンがなくて, 木炭車. (笑い) バスで木炭車にぶつかって, 車エンコさせて. 皆で押してやった覚えがあります. (笑い) これ, 4年生の時の修学旅行でした. 基隆からずっと. 九州には行かなかったんです. 巖島とかね, ずーっとすぐ東京に向けて. 京都, 大阪, 名古屋, 横浜, それから最終は日光までです. そこからもう帰ってきたんですよ. 昔の旅行は皆夏休みを利用してますから. 40日間位で. 皆船ですよ, その代わり. 今みたいに贅沢に飛行機なんて乗せない. (笑い) 富士丸. 富士丸は7,000トン位かな. それが昭和14年の思い出です.

菅野 修学旅行は内地旅行だったんですね.

宮崎 修学旅行, 内地旅行は昭和14年にしか行ってないです. さっき言ったような所で, 北海道とかあんな所は行ってない.

宮崎 しかし私らはね, それでも英語だけはね5年間やりました. 英語は廃止じゃない. 野球もやってるし.

台湾ではお宅よく聞かれる嘉義農林って. あれはね, 「蕃人」(日本統治時代に用いられた台湾の先住民族に対する呼称)ですよ. だから, 年齢がね, 普通中等学校より年齢差があって. もうオジサンだ. 先生と同じ位の連中が選手ですからね. だから力は強いし. もちろん「蕃人」はもう普通の日本人よりも力強い.

年齢差が, 大きいのでは3~4年違うんじゃないかな. だから後から制限が出たんです. 中等学校っていったら, これは年齢差があり過ぎる. だから制限せいでって言って. 嘉義農林は制限受けて, それからはちょっと入らなかった. もうピッチャーがね, 豪傑でしたから.

菅野 そういう裏話があったんですね.

宮崎 あります. 野球って言ったら嘉義農林. 「嘉農, 嘉農」って言って. 嘉農はほとんどアミ族. 「蕃人」は強いです. 私らも人夫に使ってみたんだが, 全然普通の台湾人とは違う. 高砂とかあれは原住民族ですからね, 後から入ってきたのは福建と広東と. だから福建語, 広東語で, 北京語はほとんどないです.

菅野 工業学校にいらした時の楽しみというのはどういうものがありましたでしょうか.

宮崎 そうねえ、学校で楽しみというのは、どうかな、あったかな。もう勉強一筋。（笑い）部活にも入ってはいましたよ。1年から5年まで剣道やっていますからね。剣道有段ですよ。剣道は免許持ってますよ。

菅野 素晴らしいですね。

宮崎 今でもチャンバラの道具だけは持ってますよ。木刀は持ってる。やりはしないけど。（笑い）

菅野 日々のお勉強と剣道と。

宮崎 そうね、それ位が5年間の楽しみじゃなかったかな。

菅野 台湾でよく食べた好きな食べ物などは。

宮崎 別に、その時分そうね、どれが好きだとかってというのはなかった。

菅野 台湾でよく食べられたのはどういった食べ物でしたか？

宮崎 そうねえ、特別な食はない。ご飯さえあれば、芋なんかは食べたことはないが、食事はご飯とお汁と。それと弁当だけはお袋が在学中は、明太子ね。明太子はよく出して、それと昆布とかね。塩昆布ですよ。それから天婦羅なんかも。そんなもんですよ。

台湾人の店に行って、ユーチャーケー（＝油條）とか、あれを買って食べた。近い所に台湾人の露店の食べ物屋があったんですよ。学校時代隠れて、時間外に行って、夜遅くにミルク飲みに行ったり。それと台湾そば。三銭そば。

菅野 台湾そばってというのは。

宮崎 沖縄のそばと似てるね。肉も入ってね。五銭からはちょっと質が良くて、天婦羅も、カマボコも入るとる。学生時代はそんなもん。もう三銭位が関の山じゃないか。五銭なんてのは贅沢。（笑い）お袋の、琴の先生で生活してるんだから贅沢は言えない。

菅野 何か思い出に残っている行事等がありますでしょうか。

宮崎 うちら、今日の日は毎年マラソン。学校出て駅まで。松山の駅まで走らされて。10キロでした。往復で。必ず1年から5年まで、全部11月3日は。翌日は便所行くのも、足が突っ張ってから。（笑い）普段あんな走ったことないから。

菅野 なぜ11月3日だったんでしょうか。

宮崎 どうして決めたんだろう。あの時はね、文化の日とはいわない。明治節ですからね、11月3日はマラソンって決まってる。学校からいつまでもあっちに走らされて。1年から5年の、1000名の連中が後ろの運動場から走り出して。

菅野 工業学校の後は進学予定はあったんでしょうか。

宮崎 私は高等学校は台湾では出てない。工業はですね、中学なんですよ。高等工業ちゅうのが台湾には一カ所しかないんです。台南に。こっちは土木はないんですよ。だから、高等工業に行く余裕がない。なぜならすぐ兵隊（への入隊）が来てるから。だから高等工業には行ってません。高校には行きたかったんですけどね。山梨に。

菅野 山梨ですか。

宮崎 山梨に希望してたんだが、もう兵隊に当たってしまったから行けない。もうその時分は兵隊が先頭ですから、延期きかない、後はあれですよ、師範学校の先生とかだったら途中からもう全部兵隊に降ろされてしまって、もう師範学校は卒業してないはずですよ、戦時中は兵役が主体になって、できなかった。だから私も卒業して1、2年はあったけど、結局学校に行きたくても卒業ができないんですよ、中途半端になるから、だからもう、これじゃダメだからって言ってそのまま兵隊に行っちゃった。

で、兵隊でもまた、中等学校出は軍事訓練を受けてますからね、幹部候補の資格、試験を受けることが可能、でも兵隊で勤めるつもりがないから、まあそれで生きたんでしょ、志願した連中はもう皆サヨナラですよ、戦争に勝っておれば生きていたかもしれないけど、負けたから、皆戦死してる。

同級生では今沖縄本島に残っているのは2人位じゃないかな、後は皆死んでしまった。

宮崎 うちの学校(=台北工業学校)は、現在国立台北科技大学になってるけど、15年前に100年祭やりましたね、で、わざわざ向こうまで行って、100年のお祝いもしてきました、われわれが台湾にいる間中、高速道路ってのはないんですよ、それが行ってみるとあっちこっち高速道路が出来てるし、

これうちの学校です。(写真を指差して)もう今は、学校は(景観が)違っている、今はもう昔の学校の面影が何にもないんですよ、だからね、行っても、自分の学校でない、学校の形は何にも残ってない、残ってればね、行っても楽しみがあるけど、残ってないから行っても、

VI. 台湾総督府での勤務と「新高港都市建設」

菅野 台北工業学校を卒業された後は、

宮崎 で、5カ年間の工業学校を終えて、その時は、昭和15年3月5日に学校を卒業して、もうすでに1月からは(実習で)台湾総督府の土木です、内務局土木課というところですね、その都市計画技術係に、もう1月から実習に入っていたんです、そのまま卒業を3月5日にして、6日からもうすぐ本採用です、で、そのままそこで生活しまして、たまたま4カ年は勤めて、で、あっちこちまた、台中州^{こせい}の悟悽って所に行きまして、そこで現場住みまして、ま、戦争がなければそのまま台湾で生活したでしょうけど、

私はたまたまね、現場に就職して、ちょうど作業中に、結核、独身炊事でね、一緒の方で、沖縄の人ですよ、宮城さんの方が結核でね、この人が感染して、2人感染しまして、1人は台湾人ですが、これは亡くなりました、結局は病気で兵隊に遅れて、4年位働きました、悟悽って所で、

菅野 何という場所ですか。

宮崎 悟懐っていう所です。港は今“悟懐港”と書いてあるんですよ。そこは本当は“新高港”なんですよ。それが“悟懐港”になって、あんまり栄えてない。私らに言わすと、ダメ。（写真を指差して）これこれ、悟懐。本当は“新高港”にするつもりで、「新高港都市建設」という名称ですが、“新高港”にはならず“悟懐港”になってしまいました。

そこは悟懐っていう場所なんですよ。清水と悟懐と沙鹿と、この三つを一つにして街を作ろうと、60万の人口を入れる計画をしてる。

港は立派に出来ただけど、あれ台湾人がやってるから日本人がやる港とちょっと様子が違う。ちょっと寂しい思い。

菅野 「新高港都市建設」ですか。

宮崎 はい、そうです。台湾の中部、悟懐って所に、新高港っていう港を作って、その後ろに商業都市を、60万の人口を。うちが都市計画を。これ総督府の業務です。台湾総督府の直営業務でしたからね。

総督府っていう所は指導庁なんですよ。ここ（沖縄）でいえば県庁みたいなもん。自分で計画出して業務はやらない。ところが、これだけは、都市の建設だけは総督府の直営です。うちが、総督府の都市計画の技術系の職員が向こうに出向して、向こうに詰めて、そしてそこで道路計画、自分らで施工もして。直営業務ですからね、勉強にはなりましたよ。

こういうのは沖縄にはないんです。沖縄の県庁辺りでは業務は全部業者に入札させるんです。県庁の職員は全然やりません。監督だけです。僕らは自分で設計して、自分で実際現場で業務者もちろん使いながら業務をさせる。そして直営ですから絶対間違いはないです。

この業務で私は一生涯台湾で終わるんじゃないかなあと思ったんですが、兵隊があるものですから。私が1本だけ50メートルの幹線道路作って。そして、すぐ兵隊。兵隊だけは拒否できない。兵隊に引っ張られて昭和19年に打ち切っちゃった。

菅野 総督府のお仕事をされたのはどういう繋がりでしたか。募集があったんでしょうか。

宮崎 募集じゃない。僕らの場合はね、学校の卒業前に実習に行ったんですよ。3月5日に卒業する前に一度外に出して実務実習。実務実習の関係で出て、そのまま継続して勤めた。その時はまだ本採用でない。それで3月5日が卒業式、6日からもうその場所に継続して勤めてる。

なぜそこに行ったかという、別に自分が希望して行ったわけじゃなくて、たまたま実習に行った所で、都市計画の技術係に行って、そのまま採用になってしまった。

菅野 ではご自身の希望ではなかったんですね。

宮崎 全然そういうのではなかった。その時分はね、軍がね、相当「採用する」とって言って。陸軍海軍から相当希望があったけど、誰も行かない。戦争に入ってきてるから、仕方なく行った連中もいるけど、あんまり希望しない。行ったらそのまま採用で軍需関係の業務に充

てられるから、その時分に軍隊関係で入った人はそのままそこで兵隊さんに、技術将校、技術部門に携わったでしょうね。われわれはもうそれを希望してない。民間業務、というよりは官庁業務。

台湾ではあの、民間業務ってのはないんです。ほとんどが官庁。電力とか公安とか鉄道とかそれから今の総督府。総督府の中には三つの係がありましてね。土木課の中に、河川科、ダム関係の水利係。水利係、八田与一はうちの隣の部屋におりましたからね、よくわかる。東大出の。台湾では今でも神様ですよ。ダムの先生。河川、水利、それからうちの都市計画。三つが土木の下にあってそれ以外ない。鉄道とか公安とかは別部門であるんです。あれは港務交通局。

その時の辞令がありますよ。(辞令を見せる)私の辞令です。これね、75円でした。75円っていったら、二等旅費。普通75以下は三等ですよ。で、これは75円以上になると二等旅費。宿泊も二等旅館、級が上がる。もうこの次からは任官が来るんです。この辺七等六級ってのは任官。規定の三級、これは判任官です。判任官、高等官って言ってね、階級が、総督府の中にはあるわけ。しかも八田さんなんかはまた総督府の辞令じゃないんですよ。あの人は、勅任技師は本土から、総理府から来るんです。

菅野 総督府の中でお仕事をされて。

宮崎 はい。総督府に勤めるが、私、総督府入ったら両方掛け持ちしたんですよ。警察局的ね、建築取締り。戦争中防空圏作って、飛行機の関係で。取り締まりがあって。総督府の土木課と警務局の建築課と兼務しましたから、警察会館に泊まったりもしました。警察の印象ね、その時分の警察は厳しいからね。

で、今度はさっき言ったように昭和16年からは「新高港」っていう都市計画を計画したもんですからそこから出張して行って台中州の州庁に行って地図を写したりして、そしてなかには現場に行ってますね。現場に詰所があるんです。詰所で勤めて。もう総督府からは出てるんです。出てるといよりは、総督府の勤務ではあるが、出張してるんです。こっちに泊まり込み。2年位泊まり込みしましたからね。(写真を指差して)これ自分の上司です。

菅野 (写真の説明書きを見ながら)森田主任。

宮崎 昭和17年ですか。「昭和17年に詰所で」って書いてあるでしょ。悟悽の詰所です。詰所の中にこれだけ人がおる。これが森田、この人も一緒です。この人と3名。これは別です。これが宿舍。泊まり込み。昭和15年に卒業して、昭和16年からはこの業務のために出張して台北を離れてそこに泊まり込みで業務していますけどね。これは出張先。3カ月は州庁に行って地図を写して。

菅野 台北と台中までの移動は。

宮崎 台北から台中は、その時分は3～4時間かかりますね。汽車で。鈍行ですけどね。今は新幹線で1時間で行くっていうけど、その時分はそんなもんはない。通ってはできないもん

だから宿舎を、泊まり込みで、「出張中独身宿舎にて」って書いてある。昭和15年7月29日、こっちに3カ月泊まったです。台中で。

菅野 台中はそれまでは足を運ばれたことは。

宮崎 いやいやいや、全然ない。行ってない。仕事するために行ったんです。それからは、この図面を写して済んだら次はもう現場よ。同じ台中の現場ですよ。場所は全然違う。これも、こっちが台中州庁でこれからはもう全然違います。同じ台中ではありますけども。悟懐っていう所で。新高港でしょ。

菅野（写真の説明書きを見ながら）「新高港建設事務所」。

宮崎 こっちは海水浴場跡に宿舎構えて、ここでしばらく仕事して。これからはもう町中に行ってるんです。これの近くに宿舎がある。これ実習生ですよ。3名は。

図面なんかもあるんですよ。ボロボロになってしまってお見せする図面じゃない。私が実際に書いた図面があるんですよ。大きな図面がね。だけどもう長いこと開けてみなかったら虫が食っちゃって。皆ボロボロになって。あそこの現場の思い出はあるんだが。あの図面で仕事したいんだが。（笑い）

私らの場合はやっぱりそういう測量を伴う都市の建設をするもんだから、その場所が栄えていくのが、どんどんどんどん埋めて道路が出来る。そうすれば街がだんだん変わっていきますからね。楽しみではあったんですよ。もう戦争さえなければね、本当に立派な町になったでしょう。おそらく沖縄には帰って来なかった。（笑い）

戦争の被害がなければ、継続しておれば今でも向こうにおったはずですよ。うん。魅力はありますからね。ここではまた仕事があるんですよ。ですから、もしもこっちが継続できるならば残って働きたかったんだけど、日本人は全部引き揚げさせられたもんですから。

菅野 「新高港都市建設」は幻の計画になってしまったわけですね。

宮崎 ええ。もう本当に残念です。戦争がなければねえ。今頃はあっち（悟懐）で「宮崎島」も出来ていたかもしれん。（笑い）兵隊に行く時も、「宮崎島を作ろう」って言って笑ったんです。（笑い）

で、その後どうなったかって、3年前行ってみたら、もうそのまま。田んぼだった所全部埋めたんです。3メートル位埋めて、そこに住宅を入れる計画をしてたんですが、成立してない。いやーもったないな、あれ。港はできてるんですよ。港づたいに台湾人のお店が沢山ありました。今でも、もう少し若ければやってやりたいなあって気はあるんですよ。あんなして不毛の地にしてね、捨ててぶん投げて。計画はあるのに、実現してないから。惜しいです。考えたら。

VII. 台湾人 — “琉球人” の関係と文化的近似性

菅野 先ほど末広小学校クラスに台湾人の学生がいましたが。

宮崎 小学校はちょっと隔てがあったんですよ。小学校には台湾人はあまり入ってこない。よっぽど日本語教育を受けた連中か。小学校にね、入学させるのは奥さんが沖縄の人。建成町には沖縄の人多いんですよ。奥さんが沖縄の人。大稲程（現在の台北市大同区）辺り行くと、奥さんが外に出てきて沖縄語やるんですよ。（笑い）だから、「あれっ、あんた沖縄ですか」と言うと「沖縄」と。台湾人のワイフになってる。だからそういう方の家族が小学校に通わしてる所があるでしょう。その時分だったらね、台湾人は公学校しか行かしてない。

菅野 台湾との方のお付き合いで印象に残っていることはありますか。

宮崎 昭和8年から学校を卒業する、それまでは台湾での生活はなにしなかったですが、学校卒業して、昭和15年の3月以降は社会人ですから、それからは台湾人との付き合いとか、職場で色々台湾の連中とも会うし、台湾の生活っていうのも、その時代から初めて日本人とね、向こうの本島人（日本統治時代に用いられた台湾の漢民族に対する呼称）、本島人というんですが。

向こうの住民はですね、花蓮辺りには「高砂族」（日本統治時代に用いられた台湾の先住民民族に対する呼称）がおって。これも事件が、霧社事件ってのがあったそうですが。霧社事件（1930年に台中州霧社で発生した先住民による大規模な抗日暴動）は昭和5年、私が行かないうちにあったらしい。話は聞いてます。

菅野 先住民、「高砂族」と初めて会った時のことなど、何か思い出はありますか？

宮崎 ありますね。これは（台北工業高校での）実習の時。昭和10年の実習。ちょうど河川を、河川を横断して。吊り籠下げて河原に留めさせて、流速、水の流れを測る。この張り綱を挿したのを「高砂族」に、連中が蕃刀くわえて川を渡るんです。台湾の川はまた遠いですからね。4キロ位、河川が大きいから。こっちの木にロープくくって、あっちの木にロープくくって、これに吊り籠を下げるんです。で、その上に乗って流れの測定をする。その時に「高砂族」を使った。それは昭和10年に使いました。

菅野 なるほど。実習の時ですね。

宮崎 それで、台湾人に対してはね、差別があるんです。日本人と台湾人は、同じ学校を出ても、日本人は6割の加俸が付く。沖縄で学校の先生が30万だったら台湾行くと48万6割の加俸が付いて48万。しかし、台湾人はっていったら、台湾人は付かない。だから、私の先輩と一緒に働いてたんですけども、私よりも給料落ちるんですよ。

菅野 今の30万っていうのは…。

宮崎 ああ、昔の30円です。

菅野 30円ですね。

宮崎 私辞令持ってますから。私の給料がちゃんとわかるんですよ。お見せしましょうか。（資料の中から辞令を出す）

これ、3月6日の初めての勤務命令。その前に1月からは実習に行っって、その時は臨時工夫ですね。1円60銭。日給で1円60銭。一カ月、3乗すれば48円になるんですよ。それから月俸ですよ。そしてこれの工事の上に、これ技術屋の職名です。人夫、工事、それから判任官。そして高等官と。例の八田与一さんは勅任技師ですよ。

菅野 八重山からの女性も多く台湾に行かれていたようですね。

宮崎 それは昔ですよ。だからそこにね、人種差別があった。沖縄の方がね、小学校出て高等科を卒業したら働く所がないから、結局台湾に行ったら、台湾の日本人のね、家庭の女中さんになる子も多いんです。だから沖縄の人の女中が多いんです。そういうちょっと差別がありましたね。沖縄本島に仕事がないから、昔は紡績とかなんとかいって連れていくのは大阪とかあちこちに出ていってらるんですが、台湾は近いから、台湾に飛び出して行って女中さんになったり看護婦になったりね、そういう所で働いて。あの中で女学校とか行くのは向こうに住み着いてからならやるだろうが、小学校卒業した連中が就職で行くのは女中。それが多かったですね。

だから、向こうの台湾人なんかでも人種差別を知ってるもんだから「琉球人^{リュウキョウラン}、琉球人」って言いよったですね。

台湾は福建系が多いんですよ。それで言葉は福建語。われわれもほとんど福建語で連中と対応しよったですよ。単語だけでね、台湾人の物売りとか、人夫連中とかには福建語で簡単な単語はしゃべりよったですね。「グァー」、アイ(I)、私ですね。ユー(you)は「リー」。「チマクイッティアム」、今何時か、ホワットタイムイズイットナウ(What time is it now)、とかですね。福建語は多少はできるんです。北京語はできない。イーアールサンスー(1234)は戦争負けてからしか覚えてない。

菅野 「琉球人^{リュウキョウラン}」っていうのは台湾人からみたら親近感を込めた言い方だったということはありませんか。

宮崎 そうですね、それもあったかしらん。われわれでも台湾に行ってから琉球という言葉を知った位で、その前は「沖縄」しか知らない。ところがずーっと沖縄の歴史を調べてくると、日本に繋がるよりは、近い台湾に行ったから、その「琉球人」の言葉が出てくるわけですよ。昔、唐とかの時代に、進貢船とかね、中国に向かって。沖縄の昔にあるんですよ。薩摩に繋がるよりは先に向こうに繋がってる。だから、中国の物が沖縄にも入ってきてる。

例えば葬式。葬式でね、石垣島で誰か亡くなるでしょ。亡くなったら、そこにね、台湾では家族の他に泣人^{ナキト}、泣く人。

菅野 泣き女ですか。

宮崎 ええ、泣き女。これを、これ（お金）で雇ってね、やるんです。石垣ではね、ちゃんと

親族がついて、泣人になるんです。そして台湾のまた、これは仏教から来てるんだろのかな、亡くなってね、お棺を置いて、お棺も金持ちになると木をくり抜いてね、くり抜いて天井に上げてあります。そして、亡くなるとすぐこれに入れて、そして、台の上にお棺を乗せて、周囲に板を置いて、仏教でいう「三途の川を渡る」、長男が位牌を持ってね、クルクルクルクル回る。これ全く台湾の、建成町で、台湾人の住宅と近くですから見てるんですよ。これ、なんか見たような、と。沖縄でもね、こんな泣人とか、ノボリ上げてお墓に連れていく。全く似とるなーという所はありましたよ。

菅野 石垣には台湾の入植者の方もいらしたと思いますが。

宮崎 そうですね、スッポンとか水牛とかは台湾に行く前から知ってる。連中が持ち込んでるから。その後石垣に居ついて、逆に連中は石垣の小学校も出て、われわれと姓が違うだけでね。(笑い)もう沖縄語、八重山の言葉やるんですからね。台湾の方は大分石垣に入り込んで農業をやって、パインとか、キビの台湾系の名前のものがありますからね。宮古は知らなくても台湾はわかっておったね。(笑い)宮古と石垣は目と鼻の先だけど、宮古には行ったことはなかった。石垣から竹富島は船で15分なんですけど、竹富島に行ったことがなかったんですよ。小学校6年まで。年配の人は行き来したかも知らんが、私らの小さい時は名前だけは地図で見たけど、どんな所か全くわからん。戦後、むしろ引き揚げてきてから、石垣島に来てから宮古にも行った、という状態ですね。

VIII. 台湾での日常生活と家族の職業

菅野 お母様は台湾ではどういう生活をされていたんでしょうか。

宮崎 あのね、下宿屋。下宿屋と琴の先生ね。沖縄琴を教える。

菅野 沖縄の琴を学ぶ方はどのような方でしたでしょうか。

宮崎 やっぱり沖縄の方で。そうね、いいところのお嬢さんが習ってましたよ。教えに行ったり自分のとこでやったりしてました。習う人は大分いました。県人会に行って琴と三味線、公会堂(=台北公会堂)でそういう沖縄県人会の催しがあって、それにはもうお袋はしょっちゅう引っ張られて行きよったです。琴は相当やってますよ。放送にもね、尺八とかやった時代もあった。公会堂で。しかし、収入は知っているから、学校卒業するのやっとならしたよ。5年までは、卒業したらこの給料ですから何とかやっていけた。

菅野 お姉様の方は。

宮崎 姉はね、石垣島で。そうね、高等科までは出ますからね。で、台湾に行ったら、すぐ初めはね、バス。バスガイドやって。それから後はタイプライター。三井物産か何かの。タイプライター打つの。だから文字はよく覚えてたですよ。

菅野 台北では仕事は沢山あったんでしょうか。

宮崎 仕事はあったですよ。中には小学校出の女の子は女中さんに行くでしょ。いい職にはあんまり就けないよね。裕福な方は女学校も出たでしょうけど。うちの家内なんかは女学校出てるからいい方だったんでしょう。

菅野 その当時、お琴を習いに来られている方とか、沖縄の方とはどういうお付き合いをされていたんでしょうか。

宮崎 ええ、それはありますよ。しょっちゅう出入りってことはほとんどない。そんなね、親しくはやってないね。やっぱり生活ですから。例えば沖縄の連中でもお店を持ってる方がいれば、それから物売りをしている方。昆布なんかを売って歩くお婆ちゃんもいたしね。あんまり、全部が全部裕福な生活はしてない。だんだんだんだん、若い人が沖縄に入り込んできながら、少しはレベル上がってきたんじゃないかな。

菅野 若い人が、というのは。

宮崎 要するに、沖縄本島に職業がないから、台湾に飛び出せば、台湾は広いから、やっぱり仕事はどんな職業でも。ほとんど労務ってのはやらないんですよ。皆官庁とかね、会社の何とかに来るもんだから、いい職に皆就いてますよ。

うちの知った連中でも優秀な連中もいるんですよ。沖縄の出身でね。裁判官もやってるし、それから台北の二中の先生が。兄弟でね、一人は台北二中の先生、一人は台北師範の先生。武宮だったか高宮だったかっていう先生がおりましたよ。

IX. 沖縄をめぐる沖縄人同士の意識

菅野 人によっては自分が沖縄出身ってことを…。

宮崎 言いたくない。あーそうそうそう。そういう人もいた。

菅野 転籍するとか。

宮崎 だから今みたいにね、沖縄の人はほとんどが丁稚奉公で、「ちょっと琉球人程度が低い」という風に内地の連中からすると下げて見とるもんだから「沖縄人」と言いたくない。だから東京とか言うけど、事実上はやっぱり、言葉聞いたらすぐわかるしね。

で、一番困ったのはね、台湾から引き揚げる時。引き揚げる時ね、戸籍を要するに福岡とか東京とかにしてるでしょ。行ったこともない所に籍にしてるもんだから、今度はまた、沖縄の県民は、県人会は考えてやればいいのに、「あんたら沖縄人じゃないから本籍に行きなさい」って。行ったのはいいよ。で、また帰ってくる。そんな時は沖縄まだ簡単に入れるからね。別に県人会の許可も何もいらぬ。内地からはすぐ入れる。台湾からこっち（沖縄）へ来る時はできないです。県人会を通じて帰るもんだから。

私の場合は密航して台湾に入ってるからね。いつの間にか台湾に入ったのかわからん（笑い）兵隊に行ったと思った奴が、兵隊からいつの間にか台湾にいる。それでさっき言ったよ

うに、浦賀から鹿児島へ、鹿児島から石垣に行って、密航して台湾に入っとる。入ったら最後、私はもうそこに居ついとるわけだから。県人会は、まあお袋が沖縄の琴なんかやるでしょ。まあ「沖縄だ」と。別に名前は宮崎でも沖縄なんです。特に石垣はいつでも帰れる。だから県人会を通じなくても帰れた。

私のね、台湾の一緒のグループが、熊本の人がおりましたよ。学校の先輩。原田さんって言ってね。「宮崎くん、何とか沖縄経由してあっちに、自分の本籍に、熊本に帰れないかな」って。で、「あんた、沖縄に入るにはね、こっちから、台北から出て、沖縄に行くまでに捕まらんかな」って。石垣に着いたらね、出来るけど。要するに、台北から石垣に行くまでに、そこで捕まったら元も子もないから。もう行けないからね。その方は一度熊本に引き揚げたんですよ。

菅野 県人会の方もむしろ、沖縄出身者ってことを隠していた人には冷たかった…。

宮崎 そうですそうです。その時の県人会長はね、南風原さんとかね、それから興儀さんとかね、いたんですが、県会はそのようなところではちょっとね冷たくして、わかっているのに、どうして強いて差別をつける必要ないはずだが、と思う位。僕らはそんなこと考えないから。うん。強いていえば、私も籍は鹿児島にあって、後から逆に沖縄に直したりしてるから。以前の戸籍は鹿児島籍でしょ。

菅野 工業学校に通われた時に、沖縄出身、台湾出身、といったことで何かありましたでしょうか。

宮崎 確かに差別はあったはずですが。あったはずですが。まあ、私はそんなにまで差別はされなかった。まあ、沖縄でもいいし、鹿児島でもいいし。(笑い) 戸籍は確かに鹿児島でしたからね。ただ、事実上私は鹿児島では生まれていない。親父が鹿児島だったっていうだけです。ですから別に拘泥はしなかったです。ただし、戸籍には鹿児島とあるから、卒業証書には鹿児島と書いてみたりはしたけど。後からまた、鹿児島籍から沖縄籍に直した時にはまた沖縄籍に。

X. 沖縄人コミュニティの多様性

宮崎 確かにありましたよ。沖縄の人が差別を受けてる。琉球人^{リュウキョウラン}という言葉がある位ですから。まずいのはね、基隆辺り、社寮町(現在の基隆市中正区・和平島)ってところ。あそこ本当にね、沖縄の漁師が多かったんですよ。あっちはね、沖縄の、糸満の連中が住んでいて、その連中は芭蕉布の着物に縄でくくってね、帯は。で、裸足で街を歩くもんだから、やっぱり差別を受けるのは当たり前だ。あんなじゃ。そういう自分本位の連中もいたから、やっぱりそういうところには差別をつけられたでしょうね。役所では沖縄っていうのは一段格を下げられていた。確かに。

菅野 よく「一等国民が内地人、二等国民が沖縄人、三等国民が本島人」と言われていたといいますが。

宮崎 そうね、一等国民ではなかったですよ。沖縄人は、それはもう、台湾人よりは一つは上だろう。台湾におればね、内地人と、日本人並に見ただろうが。でも、日本人とは生活的に差があるから。

菅野 どういったところに差がありましたか。

宮崎 今言ったみたいに衣服でも、社寮町あたりはあんた、あんな格好して歩いたら、これは日本人とは見ないよ。うん。どっか人種が違うんじゃないかと。その辺から「沖縄」って言葉が出てくる。で、言葉を使わしても、うちのお袋なんかも、お歯黒、ハジチ、これが入ってる。沖縄はこれ（＝お歯黒、刺青）やってるんですよ。鹿児島もお歯黒をやっていた。鹿児島も特殊で、結婚したらお歯黒を、歯を染めてるからね。石垣島にも沢山いたの。お歯黒の。

だから、これはまさか「内地だ」とは言えない。（笑い）内地でもこれあったかも知らんね。染めは、鹿児島はある。石垣島に来てる（鹿児島の）お婆ちゃんはお歯黒しとったです。歯が黒いもんだから「はーくろー婆ちゃん」って名前付けて。（笑い）姓も違う。遊佐さんっていったかな。鹿児島でしたよ。大体石垣に来てる連中は鹿児島が多いですからね。うちの親父なんかも鹿児島から流れて来てるから。

菅野 社寮町には今「琉球漁民慰霊碑」という碑が建っていますね。

宮崎 あの辺の漁師は沖縄の連中から習ってるはずよ。その時分台湾人で漁師ってのはいない。私たちの兵隊でもね、潜りするのは皆沖縄ですよ。

菅野 そしたら、社寮町の集落とか、台北の市内にも沖縄人の集落とかは…。

宮崎 ええ、多いんです。建成とかね。そうね、建成、下奎府、上奎府（全て現在の台北市大同区）。それは沖縄集落。後、遠い所には、桃園にも行ってるんですよ。大稲程にね、沖縄人の奥さんがお寺に嫁いで、あの辺には沖縄の人が入ってるはず。

菅野 台北の沖縄人のコミュニティの中でも、「違い」のようなものはありましたか。

宮崎 それはあったでしょうね。沖縄っていても、今より広い。なんでかっていうとね、那覇の連中が向こうに行ってる。石垣島、宮古は知らない。と、この連中とは付き合いがない。だから、沖縄本島の方、うちのお袋なんかでも、石垣島に行かない限り、沖縄本島の方は石垣を知らない。ところがたまたま石垣に住んだだけに石垣を知って、で、台湾に行っても石垣の連中とも話ができる。それを全く、沖縄本島から直接台湾に行った連中は、石垣宮古を知らない。連中の言葉も聞けないです。言葉が全然違うんだから。確かにあります。

菅野 宮古八重山の方々は、沖縄本島にライバル心があった…。

宮崎 そうそうそう。首里城府だから。こっちは納める口だからね。取る方だから、それはあるでしょうが。でもそんなにまでもないかな。むしろ、沖縄っていう親近感があって。そう

ね、戦後、っていうよりも戦前でも、沖縄の芝居、踊りね。今よく平良（とみ）が出るけど、平良あれ八重山（育ち）なんですよ。叙勲もしたでしょ。あれは芝居について芝居の踊りをやって沖縄本島の言葉を覚えた。石垣の言葉だったら全然違いますからね。だからそういう風にして芝居は今の文化を運んだようなもの。石垣に沖縄本島から来て芝居をする。渡嘉敷（守良）さんとか、こういう人が芝居をすることによってそこに付いて来てる八重山・宮古の連中が付いて、それでだんだん沖縄の言葉を覚え、もう沖縄語も使える、石垣の言葉も使う、宮古の言葉も使う、でやってる。

だからそういう文化的な物はそういう連中が教え込んで来たわけですよ。もちろん沖縄と、石垣・宮古は全然区別はしてますよ。一般の沖縄の連中だったら石垣・宮古を知らない。むしろそういう踊りをする、演劇をする人が石垣に渡ったりして、むしろ向こうの石垣島の人と知り合いが出来た。そういうことですよ。

菅野 むしろ、台湾でそういった"故郷"の一体感が出来ていたんでしょうか。

宮崎 そうね、台湾で、「沖縄県」っていう名前で、宮古だろうが、石垣だろうが、沖縄本島だろうが、皆一緒にくっついてしまったわけです。といて、話が全部通じるかといったら通じない。(笑い)本部の話したって、本部がどこにあるかわからん。(笑い)特に与那国辺りだったら全然石垣島とは、同じ沖縄県ではあるが、与那国(八重山列島の西端、日本最西端にある国境の島)なんて知らんですよ。うん。今でも与那国行ったことないってのは沢山いますよ。与那国で仕事があれば別ですけど。与那国は石垣よりも仕事ないもの。

(沖縄は)不思議な島だね。小さな島が点々とあるけど、繋がってるのは、島全部歩いたかっていったら歩いてない。私らの年代でも、波照間、小浜島、それから鳩間。わかるかっていったらわからん。

菅野 実際にはよくわからない「沖縄」というまとまりが、沖縄の人々が台湾に集まることで一つに想像されたといえるでしょうか。

宮崎 そうね、こっちから行って、生活に余裕があるのは台湾ですからね。沖縄本島行ったら、一事が万事、仕事がないもの。今だって沖縄本島の企業ってのは知ってますから。

菅野 むしろ、石垣にいた時には知りえなかった沖縄の姿を台湾で知ったと。

宮崎 そうそうそう。そうです。台湾は広いからね、色んな連中と付き合ってきて。台湾人とも付き合うし、友達ができれば、人種はもう差別ない。

菅野 仲が良かったお友達にはどのような方がいらっしゃいましたでしょうか。

宮崎 ですからもう、皆一人一人消えていくから、残っているのかなあと思うんですよ。日本人は全部内地に引き揚げてるから、わからないんですよ。私が今ここに出してる写真のね、この先輩。一番訪ねたいのが生死不明。

菅野 森田さんですね。

宮崎 そう、森田さん。日大の方ですが、この人から勉強、色んなことを教えてもらった。こ

の方も亡くなってるとは思うんだが、聞く所がないんですよ。台湾人でも、私が現場で、職場で使った台湾人がいるんですよ。兵隊帰ってきてから台湾にまた旅行で行ったんです。家族も家内も連れて、行って訪ねたら、その時までは私が使った台湾人がいるんですよ。今度、3年前に息子と一緒にその現場、悟懐に行ったら、その家は空き家になってね。「この家はどうした、家族はどこ行った」って聞いたら、「台中に引っ越した」って。「この男、親父は生きてるか」ってい言ったら「死んだ」って。「ああそうね」って。じゃあもう、（その人は）息子だから、私は全くわからんから、その後はどうなってるか知らない。その時分台湾では7～8名労務として使いましたからね。この連中どこに行ってるのか。後はもう生死不明です。聞きようがない。

菅野 台湾で一番楽しかったとか、一番良かったと思える思い出とかは何でしょうか。

宮崎 そうね、やっぱり仕事をしている時が楽しみになってきとったんだがなあ。そのまま仕事ができれば最高だったけど、兵隊に引っ張られてしまって、帰ってきたら（台湾には）おれないでしょ。逆に引き揚げなきゃならない立場になって、その後はもう四苦八苦よ。仕事探さないかんし、石垣島では仕事らしい仕事はないし。今までは自分の計画でできよったのが全くできない。新しい大工さんって仕事勉強したんだから。

ま、これもこっち来たら無駄ではない。なぜかという、実務で土地家屋を勉強してきたことはそれも無駄ではない、そう思っているんです。他の調査士さんは実務経験はないから、設計の上ではわかるが、実務では、差し金で茶碗の円周を出せるかっていったら出しきらん。

われわれの測量も米軍で復帰前は皆フィート・インチでしょ。だから道具がね、フィート・インチもわからんと。ここ何エーカーか、距離がまた幾らあるかがフィート・インチで来るもんだから、スケールが違うんですよ。復帰前は大変でした。メーターはほとんど使ってない。

菅野 台湾でそのままお仕事できていたら…。

宮崎 台湾でできていたら今頃悠々自適だったでしょうね。確かに裕福に生活してたでしょう。こっち（沖縄）来てから四苦八苦。もう軍隊で一目散に戦ってきて、何もなくなって、完全に無になって動きだしましたからね。それも人生経験だ。（笑い）

菅野 楽しかったのがお仕事されていた思い出であれば、逆に悲しかった思い出はどういうものがありますでしょうか。

宮崎 そうね、やっぱり戦争に負けたこと自体が。もっと裕福にできたのに、負けたことによってね、尻すぼみになった。ということは、一番いいのは戦争がなくて平穩無事にいければ、上の学校に行って、大学も出たかしらん。自力でやれたかもしれない。その時分、意気込みはありますからね。だから今でも95歳で現役で働いてるのは私位じゃない。でも、50年、半世紀この仕事をやってきて、まだ足りなくて、もう一世紀に向かって進んでいくのは勇気がいる。やるからにはブラブラしてどうでもいいような仕事はしたくない。ちゃんとか

じめつけながらちゃんとやる。これが私の信念ですから。(笑い)

XI. 敗戦, 除隊, 石垣への引き揚げ

菅野 開戦の時のことについてどのような印象がありますでしょうか。

宮崎 昭和16年の開戦の時は、12月8日、台中の悟懐におりました。「やったなあ」と、「やったなあ」と思って。(笑い) 私はその時もうすでに大刀洗の航空隊に入隊が決まったんですよ。だけど行けなかった。病氣して行けなかった。1年延ばして、18年に検査を受けてまた19年に入隊した。

兵役は、昭和19年2月9日にですね、台湾の、台南州安平(アンピン)第84部隊、船舶工兵隊ですね。広島の子品の補充隊なんですよ。現役入隊しまして。そして、20年の12月23日に浦賀に。敗戦になりましてね、私兵隊はフィリピンですよ。ルソン島マニラで捕虜収容所にいまして。例の「マレーの虎」山下奉文さんと、捕虜収容所一緒でした。

菅野 フィリピンに行かれていたんですね。

宮崎 戦争は立体的な戦闘がなければ負けていないんですよ。飛行機と潜水艦でやられてる。私らは陸上ですから、(フィリピンで)山の中に入って、米兵を捕虜にしたんですよ。だから、地上戦闘ではそんなには(被害は)いってないが、上からの飛行機とね、潜水艦ではどうにもならない。これはもう物量です。地上で戦おうとしたら上から叩かれるから。ダメ。山の中入ったら見えないから。逆に。(笑い) 飛行機はどこでもそこでも爆撃しない。山下(=山下奉文)さんなんかその口だったんじゃないかな。捕虜収容所一緒でしたから。

たまたまこの前測量協会、私沖縄の測量協会の顧問してるんですよ。そしたら日本測量協会の会長が来て、話したらわざわざ私に本を送ってくれて。場所見たら、自分が(フィリピンで)行った所全部出てる。僕らは地図を見る仕事ですけど、上司は、陸士出の若い人で、地図はよう見きらん。1日山の上行ってまた同じ所帰ってきて。(笑い) そういうバカみたいなこともあったんだけど。今この地図で歩けば、何も同じ所帰らなかったはずだがなあ、と。(笑い)

ラグナ湖という湖を舟艇で往復して、それからポリロ島って島もあったんですが。塩炊きに行ったりして。(笑い) この辺を僕らはうんと歩いたんですよ。(本の地図を指差して)モンテンルパって歌があるでしょ。これがモンテンルパの通りですよ。この、バイ湖というんですか、僕らはラグナ湖と言っていた。この湖の中を舟艇で往復して。これまた、ポリロ島ってあるでしょ。この島を目の前に見て、ここで塩炊きしたり何だりもしたんですよ。

こっちが一番初め、台湾から来て着いた所。リングエン湾、北サン、サンフェルナンド。ここに上陸したんです。終戦はこっち、マニラ港から出て浦賀に行った。山下奉文、この方も一緒に捕虜収容所でした。そして高雄港を出て、旭兵団っていう兵団をリングエンに渡し

た。6,000名の兵隊を。満州からの兵隊でした。これ全部リングエンに渡した。

菅野 この本は何ていうタイトルですか？

宮崎 『戦争と外邦囚』。（＝菊池正浩『戦争と外邦囚―地図で読むフィリピンの戦い』草思社、2014年）

菅野 ありがとうございます。

宮崎 そこから12月の11日にマニラ港を出て、浦賀に着いて、浦賀で復員を完結しまして、23日に終戦のあれをやって除隊になったわけですね。それから、鹿児島に叔父貴がいるもんですから、鹿児島を訪ねて、12月の26日に鹿児島に入りました。

それから、そうですね1カ月ほど、正月を終えて、翌21年に、鹿児島に兵隊が、その時自分の兵籍が、戸籍が鹿児島なんです。それで、鹿児島の西部100部隊というのがですね、そこで一カ年間の軍隊俸給もらいに叔父貴と行ったんです。そこでたまたま引き揚げが、石垣島と宮古の方だけは沖縄に帰れる、と。沖縄本島はその時軍事基地になっていて入れないんです。それで仕方ない、石垣島に。

というのは、私の家族は台湾にいるんですよ。姉とお袋が。置いたっきりですから。一応手紙は鹿児島から出したんですが、全然ダメ。（笑い）返事も来ません。しょうがないから台湾に行ってみよう。そして、西部100部隊で軍隊俸給をもらったら、たまたまその場所で石垣と宮古は、郷里に引き揚げができる、ということで。それじゃあと、たまたまそこに友達がおりましてね、「石垣に行こうじゃないか」と。私は石垣で小学校出てるから、石垣に行って。石垣から台湾にはなんとかして渡れるから、やってみようじゃないかって言うもんですから、そのまま叔父貴だけは鹿児島に帰しましてね、私はそのまま船で、駆逐艦で石垣島に渡って。石垣に4日ほどおりまして、それから密航船で蘇澳南方っていう所が、台湾の東側にあるんです。そこを経由しながら基隆に入って。基隆に入ったら、もう自分も何年も住んでますから様子はわかる。列車乗って建成町に行ったんですよ。そしてお袋なんかと2年ぶりにお会いしましてね。

菅野 当時の食糧事情は如何でしたでしょうか。

宮崎 台湾から、兵隊から帰って、鹿児島経由で。鹿児島ではもう散々でした。米の飯は正月に1回配給あって、そして芋を切り干して切ってね、雑炊です。もうそういう状態。台湾へ渡ったらね、21年の4月に入ったら、向こうじゃ蓬莱米ですよ。米です。あんなね、戦争中は私もちょうど19年の2月に台南に入ったんですが、その後は兵隊ですから、食事は兵隊ですから困ってはいなかった。私が昭和21年の4月に台湾に入った時分には、内地の県では皆不自由してるけど、台湾では蓬莱米を食ってますからね。えーいや、やっぱり台湾は食べ物には不自由しないな、とそう思っていました。

その時分から台湾は中華民國のあれに入ってるもんですから、日本人は全部台湾から引揚げにゃならない、ということで。私の、総督府の職員もまだ台湾におりました。おったが、連

中と話すときも「帰る」と。それじゃ私も引き揚げにゃいかんと思って。それで、そうですね、私は4月に急遽結婚しましてね、台湾で。そして、ワイフもらって、女3名と私で4名の家族になったわけです。

菅野 戦後はフィリピン、浦賀、台湾、石垣と移動されたんですね。

宮崎 ちょうどマニラ港を出たのが昭和20年の12月11日。マニラ港を出て、そして浦賀に向ったんです。初めね、日本に帰すとかわからなかったんです。20名の幕舎があって、その中に間引きみたいになんて。全部連れて帰るんじゃないで、何名か抜くんですよ。で、第一回で抜かれて。そして、どこに連れていかれるかわからんまま、途中で台風に遭ったんです。で、23日に浦賀に入った。そして浦賀に降りて3日間泊まって、そして鹿児島に降りた。だから、昭和19年の2月9日に現役入隊して昭和20年の12月23日に除隊。

台湾密航は2月の9日に密航して。結婚したのが4月の1日なんですよ。私の結婚式は、そして10日辺りからは基隆の岸壁で引き揚げです。だから新婚の気分はもう何もない。ワイフもいいはずけども何もない。2月に台北に入って、お袋がもう台湾を引き揚げるといふんで、お袋が石垣島でのワイフはもらいたくないって。彼女は沖縄の人。私は全然わからない。お袋が走り回って。今の家内を探し出した。一面識もない。初めて。

それでもう明日明後日90歳ですよ。11月7日誕生日。

菅野 おめでとうございます。

宮崎 私は95歳。5つ違いですから。そういう時代がありました。石垣島なんて行ったこともない島に新婚旅行で連れてって、4カ年は薪を取りに。女の仕事は薪しかないんですよ。薪取り。働く場所もないですからね。あそこでは。だから私一人で4名を養うって言って。まあその位の気概はあったから。何、兵隊で1回は死んでるから大丈夫って言って。(笑い) まだそんな気概あるから働いてる。

菅野 では、最後の引き揚げまでの状況で、特に印象に残っていることはどのようなことでしょうか。

宮崎 引き揚げる時は1,000円しか持てない。うちは4,000円。私でしょ。姉でしょ。お袋でしょ。ワイフでしょ。だから4,000円。4,000円しか持てない。(笑い) 私は兵隊から帰ってきて4,000円貯めるのに苦労したんだから。(笑い)

菅野 日本人が引き揚げの際には、家財道具をたたき売りしていたとか…。

宮崎 引き揚げの時持って帰れないでしょ。私らも買いましたよ。もったいないのは新高堂の本。あれ斤掛け。担いで、はかりで、重さで。重さで売る。台湾人に売る。だからね、あれ見たら、「もったいないなあんな高価な、大学の図書館にでも寄付したら助かるようなもんだけど」って。これが買い手もないし、台湾人に売って。台湾人も斤掛けで、重さで買うんですからね。知れたもんですよ。

荷車ひいて本を買いに行くんですよ。で、その本を買ってきて台湾人に(転売して)売る。

それで生活費から（稼いだ）、要するに4,000円を貯めんと帰れないから、今から考えたらあんなせんでも金は持って帰れたんですよ。隠して帰れたんだけど、日本人は真面目だから、4,000円って言われたら4,000円しか持たない、だから私みたいな闇船で入っていった人間もいるんだから、隠れ糞はあったんですよ。

XII. 石垣への引き揚げ、そして沖縄本島での生活

菅野 そして台湾から石垣島に引き揚げられたんですよ。

宮崎 はい。それで引き揚げて、石垣島に。ちょうど、21年の、昔の天長節、天皇誕生日の4月29日に石垣島に渡った。それからですね、そこで官庁へ、八重山群島政府ってのがありまして、そこへ就職の何をやったんですが、家族4名の生活には給与が合わないんですよ。それで、土木課長の給与がその時統制令で月給150円ですから、150円じゃ4名の家族が生活できない。私はまた、台湾からの引き揚げですから、家も何もないから間借りするしかないです。だからね、これじゃできん、と。そしたらちょうど鹿児島の中の親父なんかのつながりで建設業をやっている、その所で大工ですね、

大工の見習いから始まって、人夫賃が8円でした。私の計算では、一カ月を25日として、25日働けばちょうど掛け算で200円。土木課長の給与よかいいわけですよ。これならなんとかやっていると、ということで4カ年大工をやりましたよね。ちょうど兵隊上がってきたのが25歳ですから。

菅野 大工も経験されたんですよ。

宮崎 それでたまたまいつまでも八重山で大工をやるわけにもいかんし、そろそろ大きい所出てみようっていうんで、ちょうど家内の両親がこっち（沖縄本島）にいるもんですから、こっちへ飛び出して。たまたまこの場所が空き地になっていて。家内買ったのは一族の土地なんです。わずか60坪の土地に建築しましてね、大工さんやったおかげで翌年すぐ家を、住宅を造ったんです。復興資金を借りましてね、それでやって。

そして25年の12月からは、学校が土木ですから測量業をやるうということ、当時家内の親父が、奥間っていうんですが、この人の名前、奥間測量事務所って名前、で始まったんです。それから、そうですね、ほとんど私が引き受けてやってるもんですから、25年からずーっと現在まで。10年間は奥間できたんですが、たまたま沖縄県が、地積っていう地図が戦争で全部焼けましてね。それで、地積図を作らなきゃいかんというなが出て、所有権証明書っていう米軍がミニッツ布告で出したんですが、その地図は地図らしき地図じゃないんですよ。基準っていうものがない地図でして。これじゃダメだ、もう一度作り直せと。

それで昭和32年に土地調査法っていう法律を琉球政府が作りまして、それに基づいて再測量しまして、ちゃんと基準点を出して測量して、地図を再生する、と。それが現在まで続い

てるんです。名護辺りは全部済んだんですが、まだ那覇辺りは残ってるんです。そういうことで、現在でも地積調査してるわけなんですよね。

菅野 戦後、台湾の元クラスメイトとの付き合いはありましたでしょうか。

宮崎 台湾人との付き合いはいいですよ。こっちにも、沖縄にも来たよ。ワイフも一緒に連れて。私の事務所まで見せた。そこの向かいの、西武オリオンに泊まって。近いもんだから私の所に連れて来て話もしました。台湾に行ってもまた集まりがありましたからね。その時一緒にでした。

菅野 はい、それでは本当に色々とお話いただきありがとうございます。この辺で終わりにさせていただきます。大変長い時間お話しいただきありがとうございました。

XIII. おわりに

—台湾という場で邂逅した“沖縄の多様性”と想像された“一つの沖縄”

以上、宮崎禎治氏のオーラルヒストリー・インタビューでは、戦前戦後の沖縄、日本統治下の台湾、そして台湾における沖縄出身者の位置づけとあり様が詳細に語られており、その回想は非常に貴重なものであるといえる。なかでも、とりわけ重要な指摘と感じられた次の三点を挙げてまとめとしておきたい。

第一点として、沖縄出身者の社会的上昇の場としての台湾の存在である。すでに多くの先行研究でも指摘されている点ではあるが、宮古・八重山などの離島出身者にとっては、沖縄本島へ出るよりも、台湾に進学の方が社会的上昇には近道であった。沖縄にはない帝国大学が台北に存在していたことにも明白であったように、台湾という場が、進学のみならず、沖縄では得られない多様な進路と職業の選択肢を可能としていたからである。しかも、日本人には6割の加俸が付くことから、沖縄を含む“内地”出身者にとっては、自身の経済的自立と富の蓄積を図るうえで、植民地下の台湾は大きな魅力を有する「社会的上昇のための目的地」であったといえるだろう。

第二点として、沖縄人の多様性と重層性の認識である。宮崎氏自身は石垣島で生まれ育ったものの、父親が鹿児島出身であったことから、鹿児島籍を有していた。とはいえ、実際のアイデンティティは母親側の、自身が生まれ育った沖縄にあった。そうした背景を持つ宮崎氏は、同じ“沖縄人”であっても、社寮町の糸満漁民と都市部に居住する沖縄県出身者の懸隔や、戸籍を転出させていた県出身者に対する引き揚げ時の排除行動といったような、沖縄県出身者内部においても差別の重層性が存在することについて一歩引いた姿勢で観察を行っていた。それはおそらく、「鹿児島籍でありながら沖縄人である」という重層的なアイデンティティを有していたからこそ、渡台後、台湾の沖縄コミュニティが内包する多様性と重層性についても冷静な眼差しに基づく分析を可能としたように思われる。

第三点に、上記の点につながる点として、沖縄というまとまり—“故郷”の一体感—が、台湾、とりわけ台北という近隣の新興植民都市空間において立ち現れて来た可能性についての示唆である。それまで出会うことのなかった各地方の沖縄出身者同士が、台湾という異郷の地に集い、沖縄各地の文化に出会ったことの意義は少なくなかった。「台湾で、『沖縄県』っていう名前が、宮古だろうが、石垣だろうが、沖縄本島だろうが、皆一緒にくっついてしまったわけです。」と宮崎氏が述べたように、沖縄の多様性が台湾という場において邂逅を果たし、それによって渡台前にはそれぞれ個別的かつ断片的であったと思われる沖縄イメージから「一つの沖縄」が想像され得たとする指摘は極めて興味深い点であるように思われる。

このように、宮崎氏のオーラルヒストリーからは、主として日本統治下台湾を生きた沖縄出身者の位置づけとあり様に関する多くの示唆を得ることができるといえよう。しかしながら、最後に指摘しておきたい点は、筆者がこれまで聞き取りを行ってきた他のインタビューーと同様、かつての“豊かな暮らし”を逆転させることとなった日本敗戦という経験そのものが、後の台湾認識に与えた影響についてである。敗戦・引き揚げによる生活と職業の質的变化はまさに激変と呼ぶに等しかった。それは宮崎氏にとっても、かつての台湾総督府での勤務—大新興湾岸都市建設計画を担う技術者という行政側の身分—から、引き揚げ直後における大工業への転身という形で現れた。「台湾で（仕事）できていたら今頃悠々自適だったでしょうね。確かに裕福に生活してたでしょう。こっち（沖縄）来てから四苦八苦。」、「もっと裕福にできたのに、負けたことによってね、尻すぼみになった。」と宮崎氏が回想するように、かつての台湾生活は過ぎ去った儂い夢として記憶されることとなった。

戦争によって中断され、実現をみることなく敗戦とともに忘却されてしまった未完の「新高港都市建設」プロジェクトの追憶—“新高港”にみた沖縄出身者の夢—。宮崎氏のオーラルヒストリーからは、沖縄ではもはや従事することがかなわない大開発計画を手放すことを強いられた無念さが、「喪失感」をさらに増幅させたようにも感じられた。戦後に再訪した台湾で、見覚えのない新校舎の母校や、沖縄本島のそれとは比較にならない高速道路網を目の当たりにした時の情景を語る宮崎氏の口調からは、そうした喪失感が、宮崎氏にとっての台湾という地を、郷愁感よりもむしろ異郷感によって認識される存在へと変えてしまったように感じられるのである。

「今はもう昔の学校の面影が何にもないんですよ。だからね、行っても、自分の学校でない…残ってればね、行っても楽しみがあるけど、残ってないから」—日本敗戦と戦後の分断による隔絶は、台湾における“新高港”の夢だけでなく、台湾での経験そのものを、過去に消えた遠く儂い異邦の記憶として回想させることを余儀なくしてしまったのであろうか。

【本資料は、科学研究費補助金（課題番号：25257009）による成果の一部である】

The Unrealized Dream of “Niiitaka Port” by an Okinawan Technical Officer in
Colonial Taiwan:
An Oral History of Teiji Miyazaki

SUGANO Atsushi*

Abstract

This paper is the oral history of Teiji Miyazaki, and this is one of a series of interviews which are the fruits of an oral history project that focuses on collecting memories of Okinawan / Japanese people who had living experience in Taiwan during the Japanese Colonial Era. The project's aim is not to record the political or economic success of prominent individuals; rather, it emphasizes recording personal life and experiences of ordinary citizens of the time, which would not be recorded in an official history. This series of oral history interviews were supported by JSPS KAKENHI Grant (Number: 25257009).

Keywords

Oral History, Migration, Taiwan, Okinawa, Japanese Colonial Era, Niiitaka Bay Town Construction Project

* Correspondence to: SUGANO Atsushi
Senior Associate Professor, Faculty of International Studies, Meio Univesity
1220-1 Biimata, Nago, Okinawa 905-8585 Japan
E-mail: sugano@meio-u.ac.jp